



私が図書館での仕事を始めて半年が経ちました。漠然とした本にまつわる仕事への羨望から応募しましたが、今では行動に移して良かったと感じます。

現在私は9号館にあるアジア関係図書館（分館）にて勤務しています。主に中国関連の書籍を中心に、ニッポンナリアと呼ばれる日本文化に関する洋書などが所蔵されている場所です。その中で、朝、新聞を綴じることから始まり、受付、図書の整理、書誌データの整合などが私の分館での勤務内容になります。

この仕事の中で、本に接する回数というのは途轍もないものです。加えて、外国語大学という場所故に、日常的に書店で見る図書とは違ってきます。英語をはじめ中国語、スペイン語、フランス語、ドイツ語、ポルトガル語、イタリア語、ロシア語など多岐にわたる上、出版年も前世紀の前半のものなど歴史のあるものが多いのです。

私は短期大学で学んでいますが、これらの図書に触れる時間が大いにその学習に寄与してい



濱田哲彰



ることを実感します。見慣れない英単語の羅列は、自分にさらなる刺激を与えてくれますし、多言語の本を眺めている内に言語間の関連性を見出していくこともあります。また、最初はいたずらに眺めていたキリル文字もこの半年で少しばかり理解できるようになってきました。こうした多くの図書とのつながりが与えてくれるものが、価値を為して累積されています。

つい先日、作業中の本の中に占領時代の米軍所有のものがありました。アジアの未来と題された書物の中に、米兵が手に取ったと思われるペンの跡を見つけました。その方がどういった思いでそのページを捲^{めく}ったか私には知る術もありませんが、そういった本自体に宿る歴史に触れ、感じ取ることができるのもこの仕事の魅力です。

これら図書館での経験が現在の私の仕事、勉学に意味を与えてくれます。これまでに様々な仕事を経験してきて、これほどに労働という枠を超えることは滅多となかったですから。こうした学びのある環境で、私もより精進してゆきたいと思っております。

はまだ てつあき（キャリア英語科1年次生）

